

関正フィールドノート（２）*

藤沢隆史¹⁾・高島孝宗²⁾・斉藤譲一³⁾・山谷文人⁴⁾・松田宏介⁵⁾・乾 茂年⁶⁾

¹⁾ 〒097-1201 北海道礼文郡礼文町香深村字ワウシ 礼文町教育委員会

²⁾ 〒098-5823 北海道枝幸郡枝幸町三笠町 オホーツクミュージアムえさし

³⁾ 〒097-8686 北海道稚内市中央3-13-15 稚内市教育委員会

⁴⁾ 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 利尻富士町教育委員会

⁵⁾ 〒051-8511 北海道室蘭市幸町1-2 室蘭市教育委員会

⁶⁾ 〒098-5704 北海道枝幸郡浜頓別町中央北2 浜頓別町教育委員会

The Field Note of Tadashi Seki (2)*

Takashi FUJISAWA¹⁾, Takamune TAKABATAKE²⁾, Joichi SAITO³⁾, Fumito YAMAYA⁴⁾,
Kosuke MATSUDA⁵⁾ and Shigeto INUI⁶⁾

¹⁾Rebun town board of education, Kafuka, Rebun Is., Hokkaido, 097-1201 Japan

²⁾Esashi town museum, Mikasamachi, Esashi, Hokkaido, 098-5823 Japan

³⁾Wakkanai city board of education, Chuo, Wakkanai, Hokkaido, 097-8686 Japan

⁴⁾Rishirifuji town board of education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

⁵⁾Muroran city board of education, Saiwaicho, Muroran, Hokkaido, 051-8511 Japan

⁶⁾Hamatonbetsu town board of education, Chuo, Hamatonbetsu, Hokkaido, 098-5704 Japan

Abstract. This article, from start to end, comes to 148 points. Tadashi Seki's numerous achievements represent an opportunity, and we should be very much obliged if they were known by scholars.

10月17～20日** 礼文島石器時代調査旅行記

16日稚内出発 17日朝10時船泊着、営林区駐在署土門氏を訪問し宿泊する事にする。同行者藤倉氏、柳健二氏の両人で直ちに久種湖と海の間が存在する砂丘⁷²⁾に向う。時に11時。

子供達を集めて土器片の拾集を命ずる。破片の4点も集めて其中より資料を撰ぶ。大体土器片は以前に藤倉君より寄贈を受けたものと同様であって、唯だ三四の新しい発見が模様に見られるのみ。遺跡全体は骨片と石器片、土器片の散在で唯だ驚ろくべき

遺跡である。それより発掘にかかったが直に一個の土器に當る。土器は上部を上にもむけてそのままになって居り上縁部の一部が破損して居るが全形を見出すことが出来る。土器は朝顔型土器の平底であって上縁部より3cmの所より口縁部に平行に線を引き廻して数本ありそれに対して縁縄紋を点に附加したものであってこの砂丘より出土さるものの中で代表的形態にある事を認める。即ちこの一地点の出土土器数は上述の土器数で代表されであろう所の約束を持つ土器類であった。

* Part 1: Rishiri Studies, (36): 73-82 (2017).

** 1932 (昭和7)年

この日西部にある土器の存在する砂丘遺跡地⁷³⁾に於いて骨器を得た。即ち、スコップ型であって武器の意義を有さないと考へられるものであった。始めて骨器を得て非常に喜ばしかった。夜、しとしとと雨が降る。

10月18日 礼文島調査 2日目

朝六時起床直に遺跡に向う。夜来の雨にて遺跡は洗はれて一面の石器土器片が表面に美しく散在して居る。石鎌20本、石斧(?)30本、計50本余り採集する。唯だ中に obsidian 製⁷⁴⁾の美しい三角点型が4本あった。これは北海道の関係と考えるには余り近過ぎる様であった。土器片の中で高杯の台が一個出た。

これより10時、神崎小学校に向う。遺跡⁷⁵⁾は大したものもなく小学校前の畑地に二三見えたのみ。校長に面会して話して帰る。船泊小学校に向ひ校長に面会の上話して去る。

夜、船泊病院に麻雀を行う為め訪問し、其の間葉局斯波氏より土器の所有せる事を聞く。早速一見せんことを申込み、一見せるに、福井氏⁷⁶⁾より頂きしとの事にて茶杯型の小土器にして一部欽損(?)し居れり、縄文土器は縄文の斜めに点々を押し付けたものであって最も礼文島として特徴のある土器であった。夜10時去る。

10月17日 香深 福井氏訪問

朝6時起床砂丘遺跡地に於いて骨鈎一本を得。石鎌4本を得。帰仕度を始めて10時諸氏の見送の内に自動車にて香深に向う。雨降り、又、たちまちにして晴る。12時着。福井氏を訪問して土器数をスケッチし写真をとる。珍しいものでもあるが記録にあるもののみであった。骨器を一本頂いて帰る。骨器は彫刻のあるものであって珍しく又貴重でもある。

10月20日 香深 皆見氏訪問

福井氏方入口の坂ノ下に皆見氏⁷⁷⁾居り、且つて東大に土器を寄贈せることを尋ねて、行く事にして向う。幸い在宅になり、面会し当時の事を聞くにトンナイ川⁷⁸⁾上流、現在天理教説教所の近くより出

土せりとの事であって五六個土器が出土し内2個は寄贈し、残りのものを西の寺⁷⁹⁾に寄贈せしとの事にて早速寺を訪問せるに住職不在に就き拝見するを得ず。甚だ残念でありたるも仕方なし。皆見氏より玉二個を貰に受けたり。

それより、モチ方面に行き桃岩の絶景を見る。然して桃岩よりトンネルよりの絶壁に穴⁸⁰⁾ありたり。その穴に土器二個ありたりと皆見氏語り居れり。横穴住居の一資料と存せられる。果して横なりとせば重要な遺跡と信ずる。夜、関幸一氏を訪問して今後の事に就きて語り、十時辞す。

10月21日 香深井 中村明月氏訪問

予定を変へて再び船泊に戻る事にする。朝六時起床七時徒歩で香深井に向う。途中見内神威⁸¹⁾に参り中村氏⁸²⁾を訪問したが幸い在宅であって挨拶の後、親しく遺物を見てスケッチしたが局部磨製の斧が多く地方色を持つ様である。後、遺跡⁸³⁾を案内して頂く土器片2点を得る。土器は北見貝塚土器⁸⁴⁾であって相当面白い。一時離去する。自動車にて風光を見ながら赤岩に降りる。赤岩より上泊迄、徒歩にて天気の良い島を歩る。上泊小学校裏遺跡⁸⁵⁾を見て採集して帰る。

五時着、夜土門氏方に宿る。翌朝六時テフネフ⁸⁶⁾に至り調査をするけれどイナホ崎⁸⁷⁾に一片の土器片を得たのみ。十時降られて帰り。土器を整理して帰り仕度に係かる。天気上りたれば遺跡に到り三人で発掘するや土器六個一度に出て喜ぶ事限りなくリュックサックに一杯採集して去る。午後4時出航の樺太丸にて礼文島を去る。

16日より22日迄、7日間の調査も大成功に終わった事を喜ぶ。

11月6日 幕別調査

稚中奥野先生⁸⁸⁾と正午の汽車にて遺跡地に向う。幕別のI Iが発見したと謂ふ土器片を貰ひ受け、樺岡⁸⁹⁾間の道路工事現場を実見す。渡辺家の向いの道路より出土せりとの江別土器を貰い受けた。他に類弥生式土器を得る。それより試作場に行き土器石器を撮影し二時半三角点山に至る。笹を分

け山に登る。昨年発掘した箇所を調べると類弥生式土器が一片出て居る。それより撮影して下部の遺跡地に至る。既に暮れて薄暗く遂ひに去る。

比の日は1932年の最後の調査かも知れない。唯江別土器を得たのは嬉しい。

11月20日 声問貝塚、北岸、三角点、発掘調査

朝、藤倉忠考君の同行を得て貝塚⁹⁰⁾に到る。早速発掘にかかる。場所は先頃掘った貝塚の附近を再び掘り起こす事にしたが、完全なのは出土しないが模様のある点に置いて何かまとまった点を見出した。完成品を得ないのが残念と思ひ11時頃去る。唯だ隆起紋の波紋に一種の形式を出した積りである。

それより、北岸に向う。助手が良く理解して呉れるので仕事は満点だ。雨近い秋の廣野は漠として音も無く、雲の去来の足が早い。北岸に於いて三時間余り採集する。小箱に一杯の土器片と石器が得た。土器は全く珍らしく今後の研究に待つものが出た事を喜び渡し、整理の結果は面白いと思ふ。二時半去り、三角点に向う。

先に円筒型土器の出土せる地点に偶然に土器片を掘る。比較的厚い土器であった。円筒型の一つと思ふ。三角点に於いては蒼色の濃い川辺で発掘する。素張りらしい発見であつて朝顔形上縁部に礼文鳥型式を加味した土器である事を愉快に考察された。とに角今度の調査は意外の結果を提供するであろう。唯だ助手の藤倉君に感謝したい。 21th

石川巡査の好意にて久我東助氏所有の石斧三本を見た。局部磨製、楔型、三角点丘陵出土、のもの三本で楔型が珍らしく、果して声問に出土するや否や疑問と思ふ。頂いて停車場附近の採集であるそうな？

11月23日 稚内營林区署クサンル苗圃⁹¹⁾ 竪穴調査

大田忠氏と向う。家屋の裏手十間余りの箇所竪穴あり。土器片(刻紋)を一点拾ふ。これで完全に竪穴である事が分る。三間に三間半あり、比較的大なるものであつた。

それより一昨年土器片石器片を採集した箇所に向う。防火線の稚内より上りたる小路より三十間余り上の比較的高地に点在する。石器片土器片が道路に

点出するので附近を発掘するや、俄然円筒型土器片が散出する。総て破片であり石器も半製品のみであつた。然し、遺跡が刻紋土器と円筒土器が出る点に於いて面白い。他日判明すると想われる。

11月25～26日 浜頓別再調査

事業の事で浜頓別へ出張して山軽⁹²⁾と浜頓別の間の林牧場に(=プカルウシ所在)行つたが偶然の事から、附近の丘陵に竪穴の存在を知つたので早速行つて見ると、丘の川辺に近い所に竪穴が五箇あつて即ち埋められて不成形である。そして祝部の如き焼度の縄文土器二片を得る。石斧を一本頂いて引き上げたが土器片に於いて奇異の感に打たれる。

26日

細野農場に於いて雨の中を探ねて歩いたが手カゴに一杯を得た。又、或る地点で網走土器を得たのを喜び渡し、石斧五本、石槍数十本を得た。竪穴の数が大略二百に近い事を見出す。

午後、役場裏を見たが大した獲物もなく、帰る。福田アヤ先生の所有物を見、終列車で名寄に向う。

27日

名寄着、不二屋一泊して矢口氏宅に向う。アイヌの土俗品を拓本して、函館出土の土器46点を拓本した。それよりAmerica石鏃⁹³⁾一本を貰つた事が嬉しかった。4時アイヌ部落に向う。不在にて再び矢口氏宅を訪ふ。

28日

稚内着。

1933(昭和8)年6月23日 本斗木村氏稚内町遺跡案内の記

札幌に展覧会出席の為今早朝来稚、八時列車にて声問に向う。三角点を発掘したが土産の土器を得るだけ。ソーメン遺跡の貝塚見学。土器片を採集して、稚内に徒歩にて向う。途中、ウエンナイ川の橋より30間位の箇所道路に添ふて竪穴7箇所発見。平均して2間平方で、計測する。一昨年来怪し

いと思って居った所の遺跡で、究明し得た事は嬉しい。砂であるから発掘は容易かと思われる。ちよいちよい発掘出来るかと思われるクサンル散布地を見て稚内に帰る。3時半の列車で札幌に向う。

7月7日 浜頓別地方調査記行

商用にて浜頓別に出張の途次、ブタウスの堅穴より刻紋土器の出土あり。問寒別道路にて多数の刻紋土器を得た。他に縄紋土器の出土をも見ずにしまった。堅穴郡は相当のもののように思われる。

8月7日 旧市街焼場新道路に於いて

五十嵐君と齊藤君同道にて押掛ける二十分弱にして到着。附近は一面の堅穴郡であるがその一部に新道路を開いたが為めに数箇の堅穴が破壊され、散布地が出来たものである。

発掘の結果は石斧一本を得、他に千島の系統を引く、縄紋土器を見出したがこの土器類の位置は今後の問題であろう。網野農場にて石斧一本、神社附近にて刻紋土器を得た。

7月23日 原始文化展⁹⁴⁾ 参観記

突然行く事になって小樽の開催中の展覧会を見る事が出来た。

主として杉山氏の参考品に、小樽附近のもののみであった。大して参考になったものはなかった。関東の古式土器が北海道東北の円筒に連なる事を指して居る事を一番重大だと思われた。礼文利尻が関東と陸奥の祖型に当る事との二点は今後の論議の点であろう。エオリスやら American 石鏃も参考になった。今度は遺跡と遺物との Combriation を研究すべきと思われた。

25日 講演会

大雨の夜稲穂校に開催された、橋本老の脱腺に忙然としてしまった。とに角落語と大して違ならない点を感じず。高倉氏のアイヌの話、とに角宗教観を広く話せないものかい、河野氏は全く学術的でお話の出来ない人の様だ。質問があったが何れも愚問ばかりだった。

26日 Stone Sarcle 見学

五十嵐氏と河野氏と同行にて Stone Sarcle を案内して頂く立派なものであって真正であろう。中本氏宅にて土器片の拓本をとってみる。大谷地貝塚に向い、フゴッペ小学校で拓本をとる。円筒型の種々想を見出す。今後の円筒の型式はこの地の研究が重要であろう

途中無事帰る。

8-2 記

8月10日 北見枝差⁹⁵⁾ 踏査行

心の向くまま突然枝差に行く。小学校の庭の石の古代文字は全く考へるに及ばなし。役場の村上氏の案内で枝差の入口の部落の且ってアイヌ酋長の居たと云ふ⁹⁶⁾家の裏手を眺めた。堅穴⁹⁷⁾があり土器片が二三在った。縄紋土器は北海道薄手式の底部の方であった。堅穴からは刻紋土器であった。翌日役場の土器を見たが完形はないが全形を想像得らるるものであった。オーコック型土器であるが四個の突起のあるものは把手の変化であろうと思われる。

午後、下幌別に向う。船を借りて川を上る。チャシ⁹⁸⁾は少し普通のチャシとは異なる様うに思われた。土器は円筒土器を得たので嬉しい。他は樺太型のものである。川尻の百町氏の宅地で土器片を得た。北海道薄手式江別形土器、刻紋土器、オーコック型土器の三型式である。砂中より管玉を得た。畑地にて石斧を得る。六時自動車にて立つ。其朝、田村牧場⁹⁹⁾から縄紋土器を得た。營林区署の苗圃¹⁰⁰⁾からオーコックと刻紋を得た。道路からオーコックを得て居る。

12日朝立って帰る。斜内の山道にもあるし、目梨泊にもある様だ。この枝差行では何処も出るものは同一であって唯だ円筒が小破片のみの存在である事を知る。

下幌別のチャシでは円筒土器を得たのは大収穫であろう。

1933-14-8

8月28日 聲問三角点調査

午後、写真撮影の為め問地に行く。砂丘の遺跡は

ぼつんと午後の日光に川辺に投影させて居る。全、含有する広さは60間に30間位の土地が二つある。相当広範囲なる事を思わせる。層は表面より50cmの下部に平均して50cmの厚さで南より北に傾斜して存在する。声問川の蛇行によって洗はれた岸は絶えず洗われて益々崩れかかる。包含層の一部は川辺に到って露出して止まるを見れば、川に相当遺跡の？われたと考へる事が出来る。川面より高さ10mの砂丘で之を附近の泥炭層より見れば5m余も此の台地は高く、この砂丘では一番高いであろう。有柄鍬を2本得た。

幕別の丘尖に向けて撮影して試作場に到り夜帰途につく。

10月20日 声問中田家裏発掘

午後幕別より来たり三角点を歩き一時30分貝塚に到る。

昨年発掘の続を二坪余り発掘せるに貝殻層のみの所あり 深さも二尺位であって相当の深度を有する。遺物は尠なく、僅かに土器底部の出しに止まる。それより隣地河畔の畑地を掘りし所貝層約一尺 その間に土砂、焼跡あり その下部に二尺余の貝層あり。二層よりなれる貝層を発見せり。遺物は尠く破片の数片を得たるをもって終る。上層は大きな貝殻のみにて、中間層には焼炭等あり。その下部には細片の貝殻が存在する。今後の上下層の遺物観察に注意する積りである。

1934（昭和9）年4月13日 稚内町に於けるチャシの発見

かねてより怪しいと思つて居った所のチャシを踏査したが運輸事務所の裏の丘尖はアイヌのチャシ¹⁰¹⁾であった。

実地の調査は後日に譲っておく。

5月12日 声問北岸調査

竹内君を連れて遺跡に到る。耕作中であつて遺跡を発掘する事は出来なかつたが表面採集で石鍬13本を得たが何れも無柄である点、喜ばしく感じた。即ち北前土器にはC型と云ふ事が判然したからだ。4時間余りで去る。

学校に宮野を訪ねて相談したが、郷土研究の事で及ばず乍ら手伝ふ事にした。

5月16日 宗谷村石器時代調査旅行

保勝会調査委員最初の行程として主とし宗谷村尻白より泊内及びチエトマナイ¹⁰²⁾方角の遺跡調査に向つたのである。8時自動車にて出発9時宗谷着。役場にて休息の後、神社の附近より利尻島を撮影。鳥居の拓本を取り三上校長の案内にて宗谷の墓地¹⁰³⁾に参ず。旭日ヶ丘の堅穴を見るに堅穴とは考へられない。護国寺前より石器片を得て帰る。会所前¹⁰⁴⁾にて土器片を得る。何れもオーコックの無紋土器。学校に休みて昼食の後、三上校長と共にピッカタイの丘尖式チャシ¹⁰⁵⁾を踏査する。相当大きなチャシで、丘上に一個の堅穴があつた。以前よりチャシと考へて居つたのであつたが調査したのは今回が初めてで又一つ増えた訳である。2時ピッカタイ出発。尻白4時着。先着の小田島氏と村岡氏とを連れて郵便局前面のチャシに向う。表面採集の結果無柄の石鍬を採集。小田島氏は骨斧を採集、始めての収穫である。測量して暮、鬼切別の沢に向う。表面採集の結果余り無く寺にて石器を貰らい得け去る。尻白道谷旅館に泊る。

翌朝一行は八時出発。チャシに向う。空は晴れて朗かな気持である。チャシの沢にて石器片及び土器片を採集して泊内に向う。断崖は海に迫つて少し面白い。泊内は昨年末に大火のあつた所、バラックが淋しい。泊内のイナリさんを祭つた小山は伝説の小山で、チャシと思われるのである。昔、コロポックルとアイヌとが戦つた所にコロポックルが敗戦して引き上げる時に財を埋めたので一夜で山が出来たと云い伝いうるものである。又一説に義経の城でメノコが義経を養つて居つたとも云われて居るのである。小さな山であつて高1丈2尺4間平方の小山は非常に伝説がかつて面白い。石器片が散布するのを見ると石器時代の所産であろう。泊内の学校¹⁰⁶⁾の裏は砂丘で土器片、骨片が散布する。骨斧と石鍬とを得る。砂丘の崩れた所から刀が出て居つたと発掘の結果は人頭骨の歯ばかりが出た。刀剣は直刀の類であろうか。土器は刻紋土器、オーコック系の陰

刻土器である。石鏃は何れも無柄。砂地をぼつぼつ、時刻にたどりつく。4時

5月18日

時刻9時半発。チェトマナイ着。区長山田仁五郎氏宅にて休息。山田氏よりチェトマナイのチェトイの出土する箇所を指示され、実際にアイヌが食べたと称することを裏書きする。

午後2時発。知来別4時着。列車にて稚内に帰る。

7月9日 礼文島調査行

突然礼文島及利尻島を調査する事になって9日の富山丸で正午船泊着。早速、土門氏を訪れ十兵衛沢¹⁰⁷⁾に飛行す。表面採集は一本の石鏃を得たのみで終り、西部の崖際に向って発掘する。土器は不取物に、横に平つぶされたり逆さに入ったりして居る。二枚ばかり写真を撮る。

四時間調査後の五時、土門氏に宿る。気の毒を掛けるのですが研究その他の便宜上止むを得ない。

10日

朝、雨降る。十兵衛沢を測量に、後、長昌寺¹⁰⁸⁾及び役場、学校に立ち寄り、午後2時テフネフの遠望撮影に西海岸に向う。道は先年より非常に良くドライブウエイが出来て居る。左に折れて林内歩道を歩む。美しい風景が登るにつれて支配され遂ひに絶景の地に達する。ゆっくり撮影して山を下る。

11日

香深に行く日。土門氏の■をとって九時向う。途中寄っては写真を撮り、香深井に降りる。中村氏を訪れ昼食後、チャシ¹⁰⁹⁾を見学して香深市街に入る。直に元地向う。誠に絶景である。地藏岩の奇怪なのは驚る。富士見ヶ丘により撮影して学校の畑を見るとチャシ¹¹⁰⁾を一個発見、大発見である。学校により石器を拝見して去る。夜、吉野屋に泊る。

7月12日 香深泊

待った船が来ない。一日順延の島泊である。昼迄書類整理して正午厳島神社へ拓本を取りに行く。天

保三年在銘の鳥居¹¹¹⁾が社前に横わって居る。之は現在役場の在る所より発掘されたものであって鳥居の一本が見えない。然して神社が現存して居ったかどうか不明である。考すべき点であろう。

福井氏を訪ねて遺物を見る。有穴の石片、コハク玉、貝等を見る。晴天で利尻島を眺めて居る。午後6時。

7月13日 禮文利尻島行

7時半樺太丸で打合わせた小田島氏と共に乗合せて鴛泊港に着く。好天でサロンに話ながら着く。自転車を取って愈々11里行程記が始まる。時に11時。悪路に悩まされて、寺に着く。藩士の墓¹¹²⁾を見てオトントマリ¹¹³⁾に着く。非常に広大な遺跡で円筒土器とオーコック土器と出土する。表面採集の結果土製玉二個を得た。土器は関東の臭がある。2時出発。一路杓形に向う。種頓内の墓¹¹⁴⁾をみて村に入る。役場で休息。花月で食事して四時半出発で撮影する。一番景色の良い所であろう。曲折して仙法志に着く。役場で休息。直に出発。海岸の風景を賛美してオタトマリ¹¹⁵⁾に着く。既に薄暮、電気がついた。山を登って下りた。鬼脇であった。宿に着く。8時。

空白な Page に答ふ

若き日の情熱に燃えて勉強しなかった幾年月の空白が、唯今の落ち着いた境地では全く損をした事を思われる。子供が出来てよちよち歩く今日此頃に、何思つか又整理し始める。稚内へ三年振りの帰郷。そして若き研究家北構君¹¹⁶⁾の来訪に、若き人達に追い越されまいという考えが、こんなに迫害しく自分を責めるのであった。礼文の関東式も、又、日高の研究も論文に書いた今日此頃は、又猛烈に製作欲が起って来て居る。懐かしい故郷の山河は永遠に愛し、永久に眠る遺跡の数々に無限の愛着と又、報文を与えたいと思うのであった。十年の勉強の成果を論文をまとめて、次の飛躍に供へたい!!

昭和14年 1939-8-12日

1939(昭和14)年8月12日 本輪西貝塚発掘記
8-9日。正午より隣家の鹿川君を伴ひ本輪西貝塚¹¹⁷⁾

を発掘するに出掛ける。土地は板谷家の所有との事にて差出人小松家にて話を承り、小松氏の案内にて現地に向う。小松家の前面畑地の林の中に在り、畑地より5間位の箇所を貝を露出して存在す。一度、東北帝大の方々が発掘せり¹¹⁸⁾との事にて試掘の跡あり。

遺跡は南に傾斜してあり、貝層の一番端方を発掘す。表土 40 cm, 貝層 35 cmにて終る。土器は貝層より三四点出土せるのみ、何れも羽状縄紋の円筒土器で、糸をほぐして附した如き土器底部を得て居る。

貝層中より鹿の骨及び角を相当多数に得た。貝は朝り貝及北寄貝を主としてホタテ貝、カキ貝を見出す。4時半発掘を終り、畑地の表面採集に移る。石斧残片一本得たが部厚い。ハマグリ刀であった。石板一本得た。石鏃は見られなかった。石器片は黒曜石が主であった。土器片は相当薄手のものがあり、又陸奥式の円筒もあった。何れにしても各遺跡の横の連絡を見なければ早急に利用し難い遺跡である。とに角、終始蚊に悩まされ通した。誠に苦しい事であった。

8月9日

室蘭市本輪西町、板谷農場に貝塚¹¹⁹⁾がある。由来本輪西町は埋立によって成生された所で埋立以前は相当湾入せる所の如く思われるのである。油脂会社と栗林商会との間の運河、それに連なる小川は相当深く沢に入る。その沢の両丘に貝塚が存在する。今春一度踏査の際に貝塚を発見したが、後日の発掘にしてその儘々としてをいたものであった。正午より小松氏の案内にて現場に至り発掘の許可を得て発掘に直手す。始め二米の一長方形の試掘をなし、表土 40 cmを取り、次に純貝層の発掘に至る。土器は貝層中に見出されるが小破片をなして居り、全形を知るに足る遺物はない。石器片は全く見出されず。僅かに黒曜石の破片を一片見出したのみ。純貝層中から獣骨が相当出土したが中に鹿の角を見出されたのは嬉しかった。4時半中止し、表面採集にて土器片を少量得た。后日に再び発掘する事にして一旦中止す。

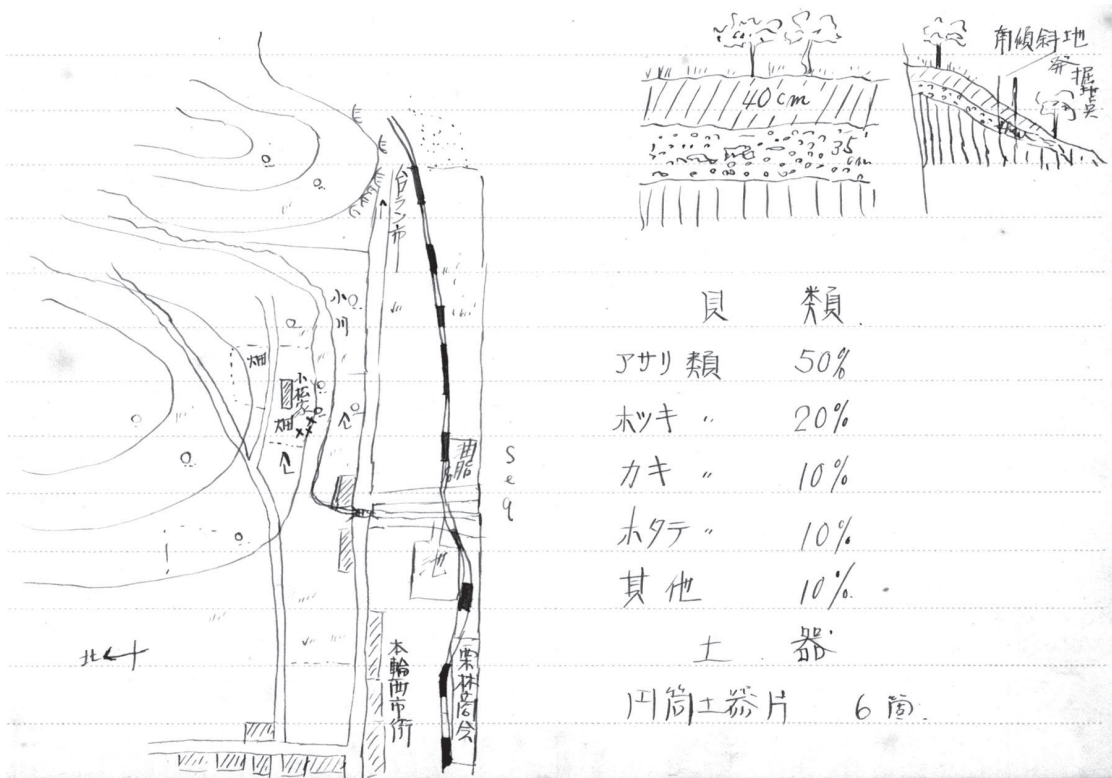


図2. 板谷農場の貝塚 (本輪西2遺跡).

(図2)

9月20日 牛太郎坂発掘記録

本日午後ヨリ高平町牛太郎坂ニ貝塚¹²⁰⁾発掘ニ向ス。所在地ハ高平町五番地ニシテ本輪西街道ヨリ牛太郎坂ノ入口及道路ニハ貝ガ散乱シテ居リ、土器片モ見ラレタ。旧土人出骨ノ地蔵尊ノ附近ハ一米ニ及ブ貝塚ガアル。何レモ発掘セラレタモノト思ハレ乱掘セラレテ居ル。一番貝層ノ厚イ地点ノ下部ヲ掘リ下ゲテ地層ヲ調査スルニ、略図ノ如ク火山灰ニヨル中断セラレタ地点があるが別ニ層位的ニ変化ヲ見ル事ハナイ。最上層ノ貝ハ完全ニ保存セラレ次ハ細片ニナリ、火山灰下ニテハ完全ナル貝ヲ見出ス事ハナイガ動物ノ骨ガ出土シ、又土器片モ見ラレル、火山灰上ノ貝層ニ石斧ガ一本見ラレタガ局部磨製デアッタ。土器片ハ何レモ縄紋土器デアアルガ、最上層ハ極ク薄手デアッテ亀岡式ニ類似シタモノデ、又中層ハ薄手ノ縄紋土器デ底部ハ僅少ノ揚ゲ底デアッタ。又最下層ノ黒色土壤ト貝殻ニ混入セル所デハ厚手繊維土器ヲ出土シテ居ル。又附近一帯ノ丘陵ハ貝塚デアッテ非常ニ豊富ナ所デアッタ。今后ノ層位的研究ニ待チタイ。

(図3)

9月6日 輪西町法華寺訪問

以前ヨリ輪西町ノ法華寺¹²¹⁾ヘ遺物を調査ニ行く

積りであつたがその期を得なかつたが、本日午後訪問する事を得た。バスで輪西ヘ降り法華寺を訪ふ。

境内にささやかなアイヌ小屋を設け遺物と宝物を展べ炉を造つてあつた。遺物は石冠と石斧が大半を占め、土器片は非常に僅かであつた。又、庭内の池の周囲にはコンクリートの中に土器片を埋めてあり、エリモ岬で得た土器と知利別で得た陸奥式土器¹²²⁾とが見られた。土器片にはエリモ岬で得た中に非常に厚手で繊維土器を見られた。又、木器の中にはマサンシントコが五箇程あり、アイヌの遺物も豊富であつた。その大半は登別ヘ陳列した相で今はこちらに余らないどうである。とに角非常に考好事家の坊主である。拓本を二つ取り、三時辞去す。

10月29日 本輪西貝塚発掘

本日、午前十時家族全部ニテ貝塚発掘ハイキングニ向う。畑に貝の露出して居る処を一坪余り発掘したが期待した二重層位は見当らなかつた。薄手ノ土器片を二三得たに止まり、正午過ぎ中止して戻る。

1946(昭和21)年5月22日 士別、名寄訪問記

又、紀行を書く事になった。一度は見たいと思つて居つた士別と名寄の遺物を見る事にして旅に出た。

士別正午着。高原氏と風連込同行なのでタイクツしない木下氏を荷馬車組合に訪ねる。不在にて在宅の様子なので大通二丁目自宅に向う。幸ひ在宅なるも病氣でお休みの所を向う。石器五缶を出して見せ

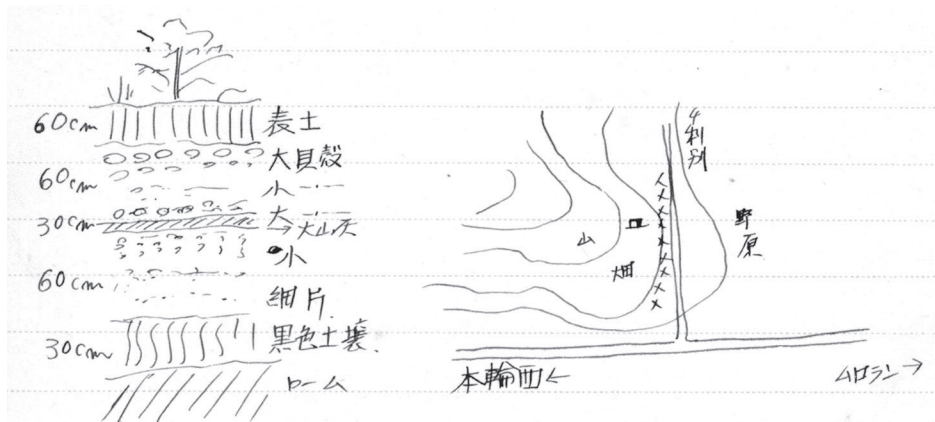


図3. 牛太郎坂の貝塚(中島町遺跡).

て頂く。別に珍奇なものなく、九十九山出土の石器の二三をスケッチする。

北見幌内出土の土器を拓本する。一時間にして去る。3時30分名寄着。まつや旅館に泊る。神山君宅を訪問する。不在なのか。矢口親之氏訪問。十数年振りにて訪問。娘(27才)の不幸の始末つづかむ事と思ひ、丁寧に申問す。閑談して、本等を譲渡の交渉したが駄目であった。尚、アイヌの宝物単タラヒを拝見した珍品であった。夜7時神山正知宅に訪問し閑談の上辞居す。夜八時宿につく。

5月23日

名寄町、広内重吉氏宅訪問ス。広内鉄工場主ニシテ広接間に大マサカリあり。珍品ト思ワレル。座敷ニテ拝見シ、スケッチス。熊ノ石ハ珍品ナリ。午后四時20分稚内ニ向う。

5月24日 稚内・声問・幕別訪問

正午、声問ニ向う。幾年振カノ声問訪問ニテ感激深イモノガアリ。懐かしに声問貝塚ハ跡カタモナク壊滅¹²³⁾シテアッタ。唯啞然タルノミ。新しい處に一箇所防空壕ノ跡ニ貝塚ノ断面ヲ発見シタノデ写真ヲ撮ル。貝殻ト土器片ヲ採集ス。次ニ発電所附近ヲ見ルニ堅穴ハ跡カタモナイ。三角点ニ到リ、石鋸ト石匙ヲ発見ス。幕別三角点ニ向う。

先日ノ山火事ニテ三角点ハ煙上シ、堅穴一個山上ニ発見ス。

次ニ試作場ニ向う。堅穴ヨリ遠望ノ写真ヲ撮ス。午後五時、西川宅ニ立寄り帰宅ス。

7月7日 神居古潭訪問

前8時30分発神居古潭ニ向う。達ト広瀬君ニ手伝ヲ願ッテ日曜日ヲ利用シテ採集ニ向う。名寄ノ神山之氏ニ聞イテ居ッタ中川弥一氏宅ヲ訪問ス。水田ト林橋園ヲ経営ス豪農デ文化住宅ノ豪勢ナ応接間付キノ家デアル。利ヲ通ジ主人ニ面会ヲ求ム。心良く招ゼラレ、応接間ノ額ノ石器集シウヲ見ル。土器三片ト他ハ石器デアル。土器ハ円筒土器ノ羽状縄紋ニ磨消縄紋ヲ持ツモノデアル。誠ニ珍ラシキ土器デアル。円筒土器ト厚手土器トノ中間ヲ行クモノデアル

石鏃ハ有柄無柄トモ半々デアル。石斧ハ美シイモノノミ。珍藏ノ土器ノ内、異形ノモノヲ写真ヲトル。コレハ筒型デ磨消縄紋ヲ持ツモノ。堅穴群ノ近くノ畠デ石鏃ト土器ヲ採集スル。土器ハ刻紋土器ト縄紋(前北)土器デアル。正后帰宅ス。

7月28日 モールス会¹²⁴⁾出席記事 札幌

モノルス会の案内を頂いたので朝6時の汽車で立つ。10時到着の上、本屋を歩き、午後一時博物館に向う。一時半より事ム室で開催。20人位にて名取氏¹²⁵⁾の講演あり。土器の話にて参考になるのは尖底土器が網走の穴より出土した事と恵山に亀岡と加曾利Bとの中間型式の土器郡¹²⁶⁾があう事である。今後の発展を期待して止まない。4時終了後来会者一同自己紹介あり。終了4時半なり。午後6時30分の列車にて帰る。

1947(昭和22)年5月3日 オサラツペ川口調査

吉田勝次氏宅附近の丘陵に僅かに散布せるを発見す。石斧、石鏃、土器を発見す。土器は刻紋土器であった。

5月30日 神居古潭調査

師範の歴史専修生40名と共に堅穴調査に向う。保存された堅穴とチャシを見学し、仲川氏宅に到り見学す。帰路中川氏の許可を得て、堅穴一ヶを発掘す。刻紋土器出土し半にして中止す。午後6時帰る。

6月2日 札幌モールス会、柳田先生を囲む会出席

6月1日、日曜日前6時出発す。博物館に名取氏訪問す。博物館で文献を徹底調査す。博物館に一泊す。曜日2日一時半より柳田氏を囲む。座談会が博物館事務所に開催さる。名取、高倉、河野、越崎の各氏の他30名出席。午後4時半迄極めて盛会であった。先生の該博には驚き入った次第であった。名取氏より杉山氏の原始工芸史2冊を頂き、誠に感謝に耐へなかった。午後6時半、帰路につく。

長谷川茂久雄氏

8月17日 北海道原始文化研究会世話人会出席

豪雨の洪水の跡，列車開通を待つて8時30分札幌に向う。午後1時半着。直ちに博物館に行き，名取氏に会う。会する者，小玉¹²⁷⁾，小林，名取，犬飼¹²⁸⁾，高倉，水島久子（河野），大場¹²⁹⁾各先生及び新潟，小樽より数氏，道庁社会教育課長，札幌市役所社会教育課長，札幌放送局放送部長，毎日新聞文化部記者，その他数氏にて，小玉氏司会して会則の審議をす。会則の審議後，役員選定す。世話人が評議員となり私も評議員の一人となる。事業としてモヨロ貝塚発掘¹³⁰⁾し，十月に学会を開く事とす。小玉先生より講演を依頼する。午後5時終了し，名取氏と事務室にて用談後，午後6時42分にて帰る。

10月11日 網走会行

木村氏の展覧会開催の通知により，午後2時30分の網走行2等に乗る。ローカル線の三等に異異に耐えかねて明るい車窓の2等で本を読みつつ旅行する。午後12時着。駅頭で札幌の九島氏出迎の名取氏，米村氏に迎へられ，米村氏宅に落ち着く。当日着の釧路の片岡氏と2時迄懇談する。

10月12日

早朝より展覧会のポスター書をする。8時郷土館見学する。四人で（米村・九島・片岡・関）で出土品の展覧会場に向う。会場整理中に駒井先生¹³¹⁾に会う。10時発掘現場に向う。各学生が堅穴と貝塚に分れて発掘して居る。丁度昨日木棺が出た所で現状を写真する。直ぐ二尺離れた横から小型の壺が現れる。又，棺らしい跡がみられる。果して木棺であった。名取氏担当の堅穴の発掘に参加する。モッコかつぎを小玉先生と始めた。堅穴の東南隅の一部を掘り取る仕事である。堅穴にはおびただしいくまの頭が出て居る。熊に鹿，海獣の三者がかたまつて居るのは全く壮観その儘である。

午後3時，一步早く切り上げ米村宅に戻る。夜，本部で讀賣新聞社の座談会に出席する。島村・原田・駒井・小玉・中島・小林・大場・伊藤¹³²⁾・名取・九島・片岡・関，米村氏司会となつて始め，盛況俚に終了す。午後九時帰宅し，文献の整理を始める。午後10時就寝す。

座談会記事

島村氏——杉山氏の言葉により発掘してみたいと考へて居つた事及東京城とぼつ海の関係を調べてみたひと思ふ。

大陸とオーコック内と日本文化の關係が判るだろうと云ふ希望である。

駒井氏——土器には關係があると思ふ。全体的に見てO式とホロンバイルと赤峰の土器内にあるものに似て居る。

鉄鏃は満州に出るものと似てハイラルに出るものと同様である。翼の張つた様な鏃である。

中島氏——熱河でも拾つて居る。

駒井氏——例が尠ないが關係があると思われる。ただ途中の研究がないから言明は出来ない。

名取氏——擦紋土器はO式と平行して居る。擦紋土器群にはハジの果径を考へたい。樺太の縄目土器は北海道に粗型を持つO式土器に移行する傾向がある。これから考へる。縄紋土器にも關係があり，大陸と縄紋の下限に關係がある。カラフトの縄目は下により，上にはO式があり，縄紋の後期の要素があり，大陸の關係との混合がある。

中島氏——青森地方の弥生式土器の中には土師多くて従来弥生式と設られて居つた。

小玉先生——各自の分担について説明あり。

土器—名取・大場

住居跡—名取

骨角器—大場

人骨—人類学教室

計測—伊藤・兎玉

動物—中島

貝塚全般—米村

貝塚学術方面—駒井

統率者—原田先生

そして結論として

アイヌは三大分別される。(千島・カラフト・本道)

頭は長頭形である。カン骨が広い。目がしばんで居る。

鼻前頭ほう含の急激な陥没がある。

アイヌは部落が違つたと地方差が激しい。

昭和2，3年にモヨロ貝塚の頭をみたがちがう。

結局モヨロはエスキモーに似て居る。鈴谷も北千

島もモヨロに似て居る。土器も同じである。アリユート人でないかと思われる。埋葬法についてアイヌは伸葬である。

反対論としては、アリユートは粘土がないから土器を作らない。

以上、要点のみ記録した。

10月13日

午前五時、九島、片岡、両氏帰る。前6時より文献調査す。

午前中博物館にて土器見学す。午後より発掘に向う。骨器を大分発掘す。午後3時半終了し、伊藤、大塚氏と宿舎に向う。午後6時別れて博物館に泊る。

10月14日

朝、児玉先生と同車で午後5時30分網走発帰着す。

10月17日 駒井博士を囲む座談会

午後2時30分、旭川駅より乗車。名取氏一行及駒井博士一行と同車。近文に下車。駒井、小林、中島及学生2人計5人、小生の土器見学し、午後3時半部落へ向う。

午後6時より中央校にて座談会開催す。小生司会者となり、駒井先生の論説より始まる。午後8時30分終了す。

10月18日

駒井博士帰る。

昭和24年7月31日～8月1日 礼文島発掘行

北大児玉先生一行の礼文島発掘調査団¹³³⁾に加入して31日夜行で稚内に向う。車中、日本ニュース中村誠二技師¹³⁴⁾とも懇談し3回目の礼文調査である。正午稚内着。一行は協会病院に向う。協会病院長と小生、児玉先生は支庁、警察、市役所に挨拶に廻り、利礼運輸にてバスを頂く事とする。帰途、神生丸に小久保氏を訪問、その元気を喜ぶ。私の栗林時代の意気を知って居る氏としては懐かしい想出の数々である。夜、日刊宗谷で軽く一杯をやり、田中氏、山本氏と夜10時迄懇談し寝につく。

8月2日

AM6:30 礼文島へ向う。途中平静にして、AM10:30 船泊着。黒岩徳伊氏宅に立寄り。正午、オシヨナイ大塚宅に泊る。午後小憩後、神崎、浜中に到る。先着の大場、伊藤先生に会う。既に入骨8体を発見し大いなる成果を上げて居る。午後1時30分女性骨一体を発掘す。副葬品としてクックルシ及ペーパーナイフを伴出す。Newsにと思い、カメラにおさめる。午後4時半終了し帰宅す。夜、10時30分消灯、床の中でフィルムをタンクに入れる。夜電話故障にて連絡出来ず、翌朝とす。人骨は子供2人男3女3、計8体である。ペーパーナイフの柄にカワウソらしき彫刻あり。極めて美しいものである。発掘品は何れもオーコック式であり、鉄小刀、骨鏃、石鏃が出て居る。児玉先生、伊藤先生、ニュース中村氏、小生の三人で泊る。かつて宿った藤倉の家は枝幸に持って行ったそうで今は畑である。又土門氏の家はその隣(?)で、オシヨナイの夜は電気に輝いて楽しい。

8月3日 はれ

AM5:15 児玉先生早起きにて小生と土器を論ず。礼文病院にカメラ用の薬品を調合用のピンを頂き、現像す。極めて良結果にて安心。午前中、電話故障直り、稚内に連絡す。昨夜の原稿を送る。11時現地に於て発掘参加す。午前中既に一体を掘り出す。午後3時又掘り出す。原稿写真を送るため、バスにて香深へ送る。pm4:30 終り、松野先生とチャシらしき丘を探見し、石鏃一本を得て6時帰る。道新と共同通信記者と三人でニュースを活かす。

8月4日 きり雨と風

昨日の山探見のために「かぜ」を引いたらしく一日参つて了つた。

終日休み、午後におシヨナイで完形土器を得る。一日寝た切りである。

8月5日 きり雨 くもり

元氣回復し、朝稚内へ電話する。オシヨナイ発掘に参加。土器はB式土器のみ、私の自信は加わ

るのみ。正午、稚内読売福田支局長来る。稚内山本組山本時男氏来たる。現家に帰り午後2時より発掘す。

ニュース中村氏香深泊り。夜、村長以下と会食す。病院のエヒノコックスの写真を取る。?とれている。10時散会す。

8月6日 はれ

昨夜末、腹痛にて松野博士から注射して安眠したが一日中病気のため静養す。この日、土器片相当出たる由、夜、中村氏香深より帰る。

8月7日 どん天 風あり

9時発掘に向う。元氣も回復し、トレンチに向う。青年団芟数の応援にて発掘著し。石斧2本と釣針1本を得、又北筒土器芟数を得る。pm6時終了す。映画のさつ影はかどる。

8月8日 はれ、くもり、風あり

整理に忙殺される。正午現場にて映画をとる。午後2時終了し各方面の挨拶に廻る。長尾氏所有牙製の人形と熊をとる。夜、村長の招宴あり。pm9:00帰る。夜、稚内に電話す。

8月9日 くもり、はれるときもあり

整理、荷造り。午後2時船が出るとの事で、伊藤、大場両氏と三人で大急ぎ港へ出る。舟は2時30分出帆し、午後7時20分稚内着。芟少舟よいの気がある。早速講演会場にのり込み、早大瀧口助教授の講演をきく。全くお話にならぬものである。米村

春義君と村瀬五郎君と、OKにてビールを飲む。Pm10:30 帰る。

オションナイ、第4の沢発掘

(図4)

(児玉博士説)

- ①礼文式土器は黒色又は褐色である。
- ②概して薄手であるが厚手もある。
- ③縄紋、席紋、羽状紋のみのものもある。大抵は磨消紋を含む。
- ④繊維は含まないが小砂利がある。
- ⑤口縁部に山型突起のあるものもある。
- ⑥肩部から上部に幾何学的刻線紋がある。時には雲様紋がある。
- ⑦将来オー式となるものの祖形を含むものがある。
- ⑧亀岡式の前期形がある。
- ⑨深鉢型朝顔型、マレニ細壺型土器がある。
- ⑩土質は堅くてもろい。輪積である。
- ⑪円筒上層式よりの派生型が主体を占めてオーコック式の祖型の影響を受けたものが礼文式である。

8月10日 雨・くもり

中村ニュースカメラマンを波止場に迎えて早大と連絡し、pm3:30分声間に向う。大曲にて調査し、映画にとり、伊藤氏大場氏は学校とお寺の人骨をとりに向う。pm6:30 終り、帰る。

8月11日 朝大雨

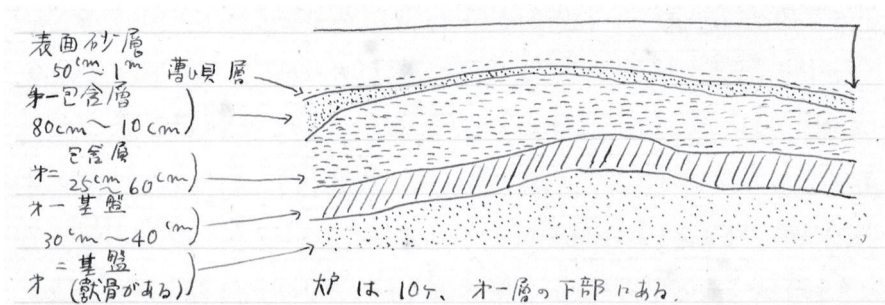


図4. オションナイ第4の沢発掘調査土層堆積図。

中村氏, 北大, 早大 am7:00 にて出発す。

1952 (昭和 27) 年 5 月 10 日 旭川焼場裏散布地調査

1:00pm, 大学の講座演習のため, 田沢, 栗原, 田中外 2 名教官と生徒 16 名で発掘指導をなす。遺跡は初め散布状態を視察。後, 畑地の中央を 15m - 2m のトレンチで始める。表土なし。45 cm の包含層あり。土器は前北土器の細片多く, 十勝石の細片あり。完成品はなかったが, 表面採集によりスクラップ型あり。前北期の単純遺跡であったことが確立したことは嬉しい。

3:30pm 発掘終了し帰途につく。

1953 (昭和 28) 年 4 月 29 日 富良野町調査

午前 11 時着。陶山氏宅訪問。石器・土器をスケッチ後, 富田一区武田家畑を調査す。石鏃と土器片を採集す。前北土器と有柄石鏃が多い。清水山, なまこ山にかけて多く出土する由。又, 布礼別のケールンを教育委員会の山下氏と 5 月初旬に調査することに打ち合せし, 午後 5 時帰る。マンモス化石のある料理屋に立寄り見る。山より出土せる由にて今後の調査に期待する。

7 月 31 日 豊富村調査

学生, 村上・白浜・櫻井・木崎・加藤・阿部の 6 人と夜行で出発。朝 8 時豊富村到着。小雨のため調査中止し, 中学校と高校の土器, 石器を見る。瀬賀老人と偶然面会す。午後の列車で稚内に立つ。夜, 全員山本宅に泊る。

8 月 1 日 礼文島のチャシ調査

朝午前 5 時半, 利礼丸に乗船し, 午前 11 時香深着。礼文小学校のチャシを見, 1 時半のバスにて船泊に向う。役場に高橋助役対応の上, 大塚氏の案内にて大塚旅館の裏のチャシ¹³⁵⁾を実測す。丘頂式チャシにて空濠二本と土塁がある。支那式の様な気もする。帰途雨に濡れ, 着替えの上浴衣にて砂丘遺跡に向う。石錘と土器を拾う。後, 寒くなり旅館に泊る。夜, 近江谷氏来談。酒, 役場より一升と新岡兄の子分和田氏より一升計二升飲む。夜半雨あり。

8 月 2 日 礼文より稚内へ

全員元気にて午後 3 時稚内到着。学生, 教育会館に泊る。

8 月 3 日 チャシ実測す

辨天町の丘尖チャシ¹³⁶⁾を実測する。常磐町の上 continuing 第 3 のチャシを発見す。同行者新岡兄, 山本兄, 高津, 市, 大沢氏, 対馬氏, 東海林氏の一行 14 名の大勢である。苗圃に抜け, 南中に米村君を訪れ, 午後 6 時半帰る。夜, 教育委員会主催の歓迎会あり出席す。

8 月 4 日

声間に砂丘見学す。美しく石匙一本と朝鮮土器破片一ヶ入手。汽車におくれ佐藤宅に休息す。学生水泳す。バスにて帰る。夜, 田沢教官来たる。歓迎の一杯を宿舎にてやる。

8 月 5 日

田沢氏と学生一行 6 名, 宗谷に坂下教育長の案内にて午後 3 時出発。午後 5 時帰る。大岬のチャシにて土石器採集す。

夜, 坂下氏より田沢氏と共に招宴あり。8 時終了す。

8 月 6 日

朝 5 時 20 分発全員帰る。旭川に 1 時到着し解散す。

1954 (昭和 29) 年 4 月 29 日 能島山調査

子供と 3 人にて実見す。前北式遺跡である。

5 月 1 日

讀賣能登谷氏と産経長命氏と 3 人にて調査す。

包含層約 30 cm, 貝塚もありたる由。能島氏に面会を求めたが留守にて会えず。

5 月 7 日 天狗山の丸山調査

今井氏よりチャシ及び堅穴ある由にて子供と出掛けるが見当らず。帰る。然し, 発見者の東山中学校の先生に電話で打ち合せたが, その場所より 20 間程上の由。残念でした!

5月23日 朝里町貝塚調査

早川昇氏より早朝電話連絡あり。バスにて早川氏と今井氏と3人同行す。朝里の小林広氏宅にて札幌土佐林氏と落ち合い旧学田、現在新光町の畑(小沢三次郎氏所有)に彫刻ある石のある由。3年前に発見し、朝枝氏が実見し、その儘となったものであった。安山岩に彫刻された如きものであって、他に大きな地中に埋没せられたものもあって今後の研究にまつものがある。継に榎里川の朝里駅裏手の丘尖に小貝塚あり。円筒土器が出土している。後日、発掘する予定。Pm2時帰る。

10月4日

大岬より亀岡式出土あり。赤色の塗料が塗布してある。教育委員会に保存せるもの。

1973(昭和48)年9月27日 藤本氏と打ち合せ

堅穴の保存と発見報告について打ち合せす。

10月6日 上声問 石黒春雄宅訪問

p4. 橋本氏と同道車にて向う。

同氏宅は以前の駅より上声問に移し、牛舎があり、同地に住んでいたアイヌ「ウノ山」「ナガノ」両氏所有のアイヌの宝物多数、そのままあり。石黒春雄 大正2年生れ、沼川7181。マンモスの骨らしき化石あり。近くの畑から黒曜石が出土するとのことで、小学校校庭にも出る由。再調査の要あり。矢づつのイクバシマイの付いた貴重なものを発見す。

9月28日 文化課高橋、福田両氏案内 保護主事 高橋稀一・福田友三

飛行機にて稚内に着。支庁で落ち合う。第三第四チャシ調査し、宅にて遺物を見て、抜海岩¹³⁷⁾見学。中村清一㊦18宅にてオーコック土器¹³⁸⁾を見る。絵が線書きしてある。抜海岩周囲は大地積の遺跡であることを判明す。

9月29日

A9:00 トヨタミ教育委員会、島田氏の案内でサロベツより豊里¹³⁹⁾を調査す。太田直治¹⁴⁰⁾宅にて

堅穴を発見し、カブト沼の堅穴の旧遺跡を案内しP1別れる。

10月2日

大岬より亀岡式朱色の土器、発見され委員会にて実見す。

10月18日 P5 松下氏来る

太田証一本道一学校

19 松下氏抜海 上声問中村氏訪問し、沼川まで送る。

土岐氏、同道す。

11月20日 宗谷調査

飯田¹⁴¹⁾吉田と私の3人で時前¹⁴²⁾まで調査す。時前の旧神社の堅穴¹⁴³⁾を発見す。

11月14日 浜頓別調査

A9.30 発 A11.50 着 委員会岡田氏、佐藤豊氏¹⁴⁴⁾との出向を受け教育次長佐久間氏に会い、直ちに開発事業所長鷺田、大谷町文化財委員と車で遺跡に向う。

①茶和遺跡¹⁴⁵⁾は堅穴約100、中に10m平方の堅穴の中に方形の土盛りあり、堅穴は方形1mの深度に散在す。砂地。

②豊牛遺跡¹⁴⁶⁾(小林宅)裏に約50ヶ、砂地。

③豊寒別川畔段丘遺跡¹⁴⁷⁾あり、約100ヶと推定される。粘土地と砂地なり。

④旧火焼場、ベニヤ遺跡¹⁴⁸⁾を遠望す。

耕土方は15cmハローを棒掛けし、小木約10cmを採取り、表土15m粘土を散布する仕方なり。その上に種をまく作業とす。

湿地帯には堅穴はなく、排水に支障なし。よって堅穴はそのまま埋立て中に石灰を投入するか、石灰を混入して堅穴と判別出来る仕方がない。鉄片を投入することも考えられる。地図は100分の1として番号を?つ作業とする。100分の一は実習にて行なうこと。佐藤所長と委員会と打ち合せしp7.35 発 p9.40 帰稚す。

1974 (昭和 49) 年 5 月 21 日 鬼志別町にて (高橋稀一氏と同行す)

浜鬼志別の草地造成の隣に後北 C の破片あり。
(士別商業在職)

名寄市西 2 条南 4 丁目 名寄郷土史研究会 山崎博信

浅野地台地調査 ミクロス 佐藤剛氏所有

註

- 1) 稚内市恵北の旧地名。1963(昭和 38)年 3 月、幕別は天北へと地名を変更し、同年 7 月さらに恵北へと地名を改めた。
- 2) 声問大沼
- 3) 現：肉牛肥育試験畜舎 裏手の奥
- 4) 旧：声問駅。1989 (平成元) 年に廃線となった天北線の駅の一つ。2000 (平成 12) 年、国道 238 号拡張に伴う発掘調査により、旧声問駅付近の調査が行われ、アイヌ期の畑跡などが確認されている (内山編, 2001)。天北線：宗谷本線音威子府駅 (音威子府村) を起点とし、オホーツク海沿岸を迂回して、再び宗谷本線南稚内駅 (稚内市) に至る。1 市 2 町 2 村を經由する非電化単線区で、延長 148.9km, 駅数 21。天北トンネルを介して旧天塩国と北見国を結ぶことからこの名がある (北海道地名大辞典より)。稚内市内では北から順に、南稚内駅→声問駅→幕別駅→樺岡駅→沼川駅となる。当時関氏が、声問、旧天北線に乗車し、フィールドであった声問・幕別方面へ調査に出かけていた様子が窺える。
- 5) 稚内市大岬の旧地名。当時は宗谷村尻白。1941 (昭和 16) 年地名変更により、大岬となる。
- 6) 旧：沼川駅。天北線の駅の一つ。
- 7) 稚内灯台。1900 (明治 33) 年に北海道では初めての水銀槽付回転式の灯台として設置された。1966 (昭和 41) 年に 900 m ほど北に場所を移し、現在の稚内灯台となる。
- 8) 北海道人類学会雑誌のこと。
- 9) 関場不二彦 (1865～1939) は、日本の外科医、医史学者である。北海道医師会、札幌医師会の初代会長。アイヌに関する研究報告も多数。
- 10) 橋本氏：小樽史談会幹事橋本堯尚氏。
- 11) 喜田貞吉 (1871～1939) は、日本の歴史学者、文学博士。考古学、民俗学も取り入れ、学問研究を進めた。縄文土器を作った人々が鎌倉時代くらいまで生活していたという仮説をたてて争われた山内清男との「ミネルヴァ論争」は有名である。
- 12) 西田氏：小樽高等商業学校 西田彰三教諭。前年の 1929 (昭和 4) 年、関正 (当時同校 5 年生) は声問川湖畔で土器片を発見し、西田氏に古代文字 (文様) について教示を求めている。その後、関正は西田氏から、同種の土器が千島・網走・樺太で出土することを教わり、一連の関連を知ることとなった。これにより西田氏は声問発見の土器から、1930 (昭和 5) 年 1 月 10～25 日、北海タイムスに論文を発表した。この論文が発表されたことにより声問土器は広く知られ、また関正が考古学に専念する転機ともなった。なお声問出土の土器群は、いわゆるオホーツク土器であるが、当時はまだ名称が一定していなかった (西田, 1930; 稚内市史編纂室, 1968)。
- 13) 新潟武彦 (1911～1990)。北海道帝国大学土木専門部卒。当時は樺太庁土木課技官。戦時中は陸軍建技大尉として出向、戦後は枝幸町に居を定め、宗谷地方の埋蔵文化財保護に尽力する。樺太考古学の先駆者として知られ、ロシア人研究者から「サハリン考古学の父」と称される。日本考古学協会、北海道考古学会幹事、枝幸町文化財保護委員会会長。論文・著書多数 (新潟・宇田川, 1990, 1992)。
- 14) 小樽市学務課 五十嵐鉄氏。
- 15) 旧：秋田木材会社。1909 (明治 42) 年、秋田木材は幕別川流域の国有林払い下げを受け、伐採材を声問川口に集材して原木を本州各地に送り始める。また 1912 (大正元) 年、自家発電装置を設置し、1914 (大正 3) 年

には稚内町市街地全域に送電供給が開始される。このときの発電所を声問第一発電所と称し、火力発電の燃料は製材過程で排出される木屑が用いられた。1920（大正9）年に同位置に第二発電所が建設されたことにより、予備となって1928（昭和3）年に廃止された。現在は、西岡弘氏の草舎として往時の面影を止めている。

- 16) 声問川大曲遺跡（旧名称：コエトイ川三角点遺跡）。1992（平成4）年、農業整備事業により発掘調査が行われている（種市・土肥、1992）。
- 17) 旧 声問駅。
- 18) クサナル。稚内市南端部の旧地名。
- 19) 稚内灯台。
- 20) 福沢農場。1902（明治35）年、堀基が農用地として国から払い下げを受けて開設し、その後、福沢諭吉の次女と養子縁組をした福沢桃介に牧場を売り渡し、福沢農場が誕生した。当時、道北随一の大きさを誇り、酪農の草分け的な存在だった。明治40年代に、バター製造をはじめ、「紅葉印バター」として東京方面に出荷され、福沢農場の名は全国に知られるようになった。現在は、福沢農場の名をそのまま止め、有限会社組織で経営されている。
- 21) 北門神社？
- 22) 宗谷支庁 多田幸雄氏。なお多田氏の父、純二氏は明治時代から宗谷地方の考古学研究者として知られ、人類学会の地名表に稚内市沼川地区の遺物を発表している（稚内市史編纂室、1968）。
- 23) 旧：沼川駅。
- 24) 柳沼・藤代・生本付近
- 25) 沼川尋常小学校：2002（平成14）年3月、地域過疎のため沼川小中学校は閉校となり、同年4月に同校を含む小学校7校、中学校5校が統合され天北小中学校が新設された。
- 26) 熊の誤りか。熊の毛皮を購入？
- 27) 1927（昭和2）年、稚内・宗谷間の乗合自動

車の運行が始まっている。関氏は宗谷方面へ向かう際、天北線の声問駅で下車し、乗合自動車に乗り替え、調査に赴いていた様子が窺える。

- 28) 宗谷村に設置されていた白尻尋常小学校。尻白は1939（昭和16）年、地名変更により大岬となる。現在の大岬小学校にあたる。
- 29) 宗谷村に設置されていた宗谷尋常小学校。現在の宗谷小学校。当時同校で校長を務めていた三上猛雄氏。
- 30) 猿払村浜鬼志別。
- 31) 細野農場は現在の日の出地区に存在していた牧場である。貝塚が確認されていることからクッチャロ湖畔遺跡と同定される。クッチャロ湖畔遺跡は1958（昭和33）年に児玉作左衛門、1959（昭和34）年に大場利夫によって調査された。調査では擦文時代の竪穴式住居173軒が数えられ、うち4軒の竪穴式住居と貝塚（縄文時代前期～中期）の発掘調査が実施された。その後、1966（昭和41）年7月7日に「浜頓別町クッチャロ湖畔竪穴群」として道指定史跡に指定された（大場・菅1977；浜頓別町史編集委員会、1995；佐藤、1998）。
- 32) 北海道帝国大学農学部付属博物館（現北海道大学フィールド科学センター植物園博物館本館）で開催された第一回北海道先史時代遺物展覧会のことか。1931（昭和6）年10月17日～24日まで、同博物館と犀川会の主催により行われた。陳列品目録が『蝦夷往来』第6号（1931）に掲載され、そこに関の名前も見ることができる（10頁）。
- 33) 秋田木材会社旧宅
- 34) 本文に記載のあるとおり、音吉の生まれは礼文島で、そこから宗谷に来て稚内弁天町に住み、のち抜海に移ったが、毎年、兜沼に沼菱を取りに行き、後、兜沼に住むことになった（稚内市史編纂室、1968）。
- 35) アイヌの儀礼用具であるイクパスイ（捧酒箸）。
- 36) 河野広道（1905～1963）。河野常吉の二男。

- 北海道大学農学部で昆虫学を専攻。森林害虫などの研究を進めた。27歳での農学博士の学位取得も著名。1932(昭和7)年当時は、後藤らとともに江別古墳群などの発掘調査を進め、その成果により「後北式」を提唱するなど、土器編年を基にした道内の先史文化体系を樹立しつつあった。
- 37) 高倉新一郎(1902～1990)。農学博士。北海道大学農学部や北方文化研究施設で植民学・歴史学を研究し、『アイヌ政策史』をはじめ多くの著作をのこす。
- 38) 後藤寿一(1899～1995)。当時山鼻尋常小学校に勤め、江別の旧豊平河畔で土坑墓群や、「北海道式古墳」を発見。河野広道らとともに発掘調査を精力的に行った。なお、1933.2.12付けの関からの私信が後藤の調査ノートには残されている。神奈川県での古墳調査など、本調査ノートに記載がない時期の調査活動を示す記録である(高倉, 1951; 中田, 2000; 北広島市教育委員会, 2002)。
- 39) 完形土器を石膏で模造したもののか。旭川市博物館蔵の河野コレクション、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園蔵の名取コレクションなどに例がある。
- 40) 下川町上名寄地区か。
- 41) 名寄市智東。智東遺跡が所在する。
- 42) 菅原繁蔵(1876～1967)は、植物学者。教職に就きながら、北海道を中心に植物標本の作製、研究に取り組み、1926(昭和元)年以降は、樺太での植物研究生活を行なう。終戦直前には、再度北海道に渡っている。
- 43) 豊原中学校。森本有親氏。
- 44) 栄浜チャシ。丘先状チャシで、12個の方形竪穴を伴う。
- 45) 薄手の縄文土器か。
- 46) イトツパ式土器か。アイヌのイクパスイにみられる柳葉形の文様が施された土器(新潟, 1930)。
- 47) 沈線文土器か。
- 48) 樺太西海岸に所在する本斗。現ネベリスク。
- 49) 木村信六(1903～1941)は、樺太庁の警察官。遺跡に造詣が深く、各地で採集している。1931(昭和6)年樺太日日新聞紙上で「本斗附近の先住民族遺跡」を連載し、遺跡の重要性と工事による破壊状況について報告されている。1933(昭和8)年、自宅に木村郷土研究所を設立し、木村郷土研究所報を発行する。採集された膨大な遺物は、樺太庁博物館に収蔵されている(野村編, 2008)。
- 50) 本斗町吐鯉保。現カザケヴェイッチ5遺跡。
- 51) 宇仁。現チャイキノ。土器とともに金属器が発見されている(木村, 1937)。
- 52) 千歳村貝塚。現ソロウイエフカ。
- 53) 貝塚小学校。
- 54) 鈴谷南貝塚(新潟・宇田川, 1990)。
- 55) 音吉アイヌ座談会: 関氏が主宰して座談会を行った。
- 56) 豊牛遺跡か豊寒別段丘遺跡と考えられる。
- 57) 頓別神社遺跡か。遺跡は豊寒別川の左岸、標高約5m程度の小山上に位置する。続縄文時代～擦文時代の複合遺跡である(浜頓別町史編集委員会, 1995)。
- 58) 文脈上、北海道帝国大学農学部附属博物館のことであろう。
- 59) 現: 川西神社付近。
- 60) 興部町沙留か。
- 61) 鈴谷北貝塚か。オホーツク文化の初期段階にあたる鈴谷式土器の標識遺跡。ソロウイヨフカ貝塚として明治時代後半から研究者に知られていた(清野, 1969)。
- 62) 千歳村大字貝塚字新場。現ゴールィムス。
- 63) 一ノ沢遺跡。
- 64) アイヌが着用したガラス玉の一種。ガラス玉でつくられた首飾りをタマサイとよぶ。
- 65) 富内村落帆。落帆1・2遺跡が、1932(昭和7)年7月28日新潟武彦により調査されている。
- 66) 宗谷村役場。なお1955(昭和30)年、宗谷村は稚内市と合併となる。現在、宗谷地区には稚内市役所宗谷支所が設置されている。
- 67) 文脈から、おそらく宗谷護国寺と考えられる。

- 68) ピリカタイ. 現 第一清浜.
- 69) オランナイ.
- 70) サンナイ. 現: 珊内.
- 71) シニウオイス?
- 72) 現在のオションナイ遺跡と船泊遺跡に該当する.
- 73) 現在の浜中1遺跡, 神崎遺跡, 浜中2遺跡いずれかの遺跡と思われる.
- 74) 黒曜石製.
- 75) 現在の浜中1遺跡に該当.
- 76) 福井隆則氏. 船泊村沼の沢(久種湖畔の小集落)に居住した農家. 農業以外にも, 乳牛飼育や久種湖での養鯉なども行った人物. 八幡(1922, 1923)は, 福井氏が東大人類学教室へ寄贈した収集品を紹介したものである.
- 77) 皆見政春氏. 1921(大正10)年, トンナイ川沿岸の道路工事の際に出土した土器, 石器, ガラス玉を人類学教室へ寄贈した人物. 一部の資料は, 八幡(1925)の中で紹介している.
- 78) トンナイ川. 入舟地区を流れる川で, 下流域にトンナイ遺跡がある.
- 79) 現在の礼香寺.
- 80) 現在の町道元地香深線桃岩トンネルの上部に旧道及び旧トンネルが残されている. 未確認であり遺跡登録はされていない.
- 81) 見内神社のこと. アイヌ伝説にまつわる神社で, 香深井湾の南端に鎮座している. かつてこの付近を通るアイヌが, 岬状に海に突き出た崖を非常に恐れ, 見ぬふりをして通過したことから「見ないカムイ」と和人が呼称したのが由来である.
- 82) 中村明月氏. 明月は雅号で本名は中村安造. 旧香深村役場職員であり, 香深井に居住した郷土史家. 『海の公園 利尻富士と礼文島』『趣味の香深村』, 『道立公園となった香深村』等の著作がある.
- 83) 香深井1(旧香深井A)遺跡, もしくは香深井2(旧香深井B)遺跡のことか?
- 84) オホーツク土器のことか?
- 85) 現在の上泊1遺跡に該当.
- 86) 北部西海岸に所在する小集落鉄府地区のこと.
- 87) 鉄府地区と西上泊地区の間にある岬で稲穂ノ崎という. 続縄文土器や擦文土器が出土しており, 現在の鉄府稲穂ノ崎遺跡に該当する.
- 88) 稚内中学校 奥野清介教諭. この年の2年前にあたる, 1930(昭和5)年7月, 東京帝国大学理学部人類学教室の赤堀英三氏が来稚した際, 奥野氏が市内の遺跡を案内しており, その際の様子ドルメンに発表されている. 赤堀氏は札幌で面会した河野常吉氏から, 奥野氏を紹介され, 赤堀氏は「奥野氏は早大出身の謹厳なる国語の先生で, 土石器の道にひどく熱心な青年考古学者である」と, 紀行文の中で評している(赤堀, 1932).
- 89) 樺岡.
- 90) 声問貝塚.
- 91) 「クサナル苗圃」か? 現: 緑テニスコート場.
- 92) 浜頓別町字山軽.
- 93) アメリカ型石鏃. アメリカ・インディアンが使う鏃の形状に似ていることから名づけられた. 基部の両端に抉りを入れたもの.
- 94) 1933(昭和8)年6月~8月まで札幌・小樽・函館・旭川の丸井で開催された北海道原始文化展覧会のことか. なお, 同展覧会の図録が発行されている(犀川会編, 1933).
- 95) 枝幸村(現枝幸町).
- 96) 現在の枝幸町北浜町を流れるホロナイポ川の河口付近に枝幸最後のアイヌ民族の首長, イルリンカ(エルリンカ)が居住していたとされる(齊藤, 1994).
- 97) ホロナイポ遺跡. 擦文時代後期の集落遺跡. ホロナイポ川の左岸段丘を中心に130軒の竪穴群が分布しており, うち63軒を発掘している(佐藤, 1980, 1981).
- 98) 幌別川尻北チャシ・幌別川尻南チャシ. 北見幌別川下流域の湿原に浮かぶ孤島式チャシ. 北チャシはアイヌ文化期の送り場とオホーツク文化期の竪穴式住居跡を検出. 南チャシは約50基の擦文時代の竪穴群が立地する(後藤, 1932; 大場・新岡, 1972).
- 99) ウエンナイ竪穴群かうエンナイ2遺跡. 擦文

- 時代後期の集落遺跡。ウエンナイ2遺跡では11軒の竪穴式住居跡を発掘した(佐藤, 1983)。
- 100) 営林署遺跡。縄文・続縄文・擦文時代の遺跡。静内御殿山式, 緑ヶ丘式土器が出土。
- 101) 弁天1号チャシ。市街背後の標高70~80mの海岸段丘上にある。1967(昭和42)年, 稚内市の指定文化財に指定。
- 102) 杖苫内(つえとまない): 東浦地区の旧地名。語義は「チエトイ・オマ・ナイ」で「食土・ある・川」(山田, 1984)。
- 103) 旧藩士の墓。1902(明治35)年, 宗谷の人たちが, 宗谷村に散在していた旧藩士の墓石を護国寺の隣接地に安置した。さらに1928(昭和3)年と1956(昭和31)年に移設され, 現在地となる(稚内市市史編さん委員会, 1999)。
- 104) 現: 宗谷町内会前 石碑。
- 105) ピリカタイチャシ。1967(昭和42)年, 稚内市の指定文化財に指定。ピリカタイは, 第一清浜地区の旧地名。
- 106) この年の前年にあたる泊内特別教授所を含めた, 1933(昭和8)年4月, 宗谷村学校の状況は以下になる。
- : 利矢古丹尋常高等小 105名・師3名
 - : 尻臼尋常高等小 182名・師4名
 - : 宗谷尋常小 84名・師3名
 - : 時前尋常小 32名・師2名
 - : 苗太呂尋常小 31名・師2名
 - : 泊内特別教授所 17名・師1名
 - : 増幌尋常小 53名・師2名
 - : 上増幌尋常小 24名・師2名
- 107) 船泊地区の大備と浜中のある小さな沢で, 河口西岸に重兵衛沢遺跡(縄文後期), 河口東岸には重兵衛沢2遺跡(擦文・近世)が所在する。
- 108) 先代住職の長尾了圓氏が収集したオホーツク文化期に属する歯牙製女性像・動物像は, 北海道指定有形文化財になっており, 現在も本寺にて所蔵保管している。
- 109) 現在の旧香深井郵便局後背段丘上に所在する香深井チャシに該当。
- 110) 現在の礼文小学校付近に所在するトンナイチャシに該当。
- 111) 旧香深村役場庁舎建設の際の地均し工事で出土したもの。厳島神社の創祀となる近世弁天社時代のものであり, 長く同神社境内に保管されていたが, 現在は所在不明となっている。
- 112) 本泊の慈教寺境内にある「会津藩士の墓」。
- 113) 大磯地区の旧地名。1932(昭和7)年に利尻島の遺跡調査をした名取武光の報告にもみられる。
- 114) 種屯内にある「会津藩士の墓」。
- 115) 沼浦地区。番屋の付近に竪穴が数個あったという(関, 1949)。
- 116) 1939(昭和14)年, 国学院大学の学生であった北構保男氏が稚内の星野五郎氏の後援で稚内地方の遺跡調査を行い上代文化に論文を発表した。この報告が当地研究の総合的調査の最初のものとなった(北構, 1939; 稚内市史編纂室, 1968)。
- 117) 記載内容から関の言う「板谷農場貝塚」, 現在の包蔵地名では本輪西2遺跡(J-01-19)のこと。山内清男らが調査し続縄文提唱のきっかけとなった「本輪西貝塚」(長谷部の言う本輪西第一号貝塚)とは異なる(長谷部, 1926; 山内, 1967; 関・直良, 1973)。
- 118) 関・直良(1973)にも同様に, 東北大学で試掘したとの記載がある。これは山内清男によるものらしく, 「大正十五年六月山内君が室蘭市本輪西貝塚(中略: 引用者)同処に近く本土器遺跡の大なるものあるを確めて来た。」(長谷部, 1927: 35)とあり, これに対応するようだ。
- 119) 関が「本輪西貝塚」として先述した本輪西2遺跡(J-01-19)のこと。
- 120) 中島町遺跡(J-01-07)のこと。大正3年人骨が6体出土した記録がある。
- 121) 現在の室蘭市大沢町にある立雲寺のこと。1928(昭和3)年に林舜祥氏によって「輪西町法華宗説教所」として開かれた寺。同氏に

- より昭和50年代まで境内に「先住民族古代遺品展示室」がおかれ、檀家などに見せていたという。
- 122) 遺跡名不明。
- 123) この2年前の1944(昭和19)年、声間駅裏の工事建設の土砂採取が行われ、貝塚の大部分が失われた。
- 124) 札幌在住の考古学・人類学などの研究者による集まり。戦後に名取武光らが主宰したという(名取, 1972; 出村, 1988)。
- 125) 名取武光(1905~1987)。先史学者、動物学者。北海道大学農学部付属博物館に長く勤め、考古学・アイヌ文化研究に従事。著作に『噴火湾アイヌの捕鯨』、『アイヌの花矢と有翼酒箸』などがある。
- 126) のちに名取が提唱する「恵山式」のことを指すか。1940(昭和15)年の恵山貝塚の調査から、戦後の報文発表まで期間が空き、仮称恵山式などとして土器型式の内容が不明確なまま、類似する資料に対し広く呼称されるようになった(名取, 1960; 千代, 1988)。
- 127) 児玉作左衛門(1895~1970)。東北帝国大学医学部卒業後、北海道帝国大学医学部教授となる。脳医学研究の傍らアイヌ民族の人類学的研究を行った。また、アイヌ文化を巡る民俗学・考古学の研究も精力的に行った。私財を投じて収集したアイヌに関する膨大な資料は「児玉コレクション」と呼ばれ、世界有数のアイヌ資料として評価されている。
- 128) 犬飼哲夫(1897~1989)。北海道帝国大学農学部生物学科動物学分科卒業後、北海道帝国大学農学部兼理学部教授となる。北海道を中心とする動物の生態を研究、特にヒグマや毛皮の研究で知られている。南極地域観測隊の樺太犬(タロやジロなど)飼育でも有名である。
- 129) 大場利夫(1913~2007)。北海道大学文学部教授。北海道考古学会の初代会長。全道各地の遺跡を発掘調査し、北海道の考古学の発展に寄与した。宗谷管内の遺跡も数多く調査し、著書を残している(大場・大井, 1973, 1976, 1981)。
- 130) 網走市に所在するオホーツク文化期の代表的な遺跡。1913(大正2)年、米村喜男衛により発見され学界に報告された。1936(昭和11)年国史跡指定。1947(昭和22)年以降大規模な発掘調査が行なわれている。
- 131) 駒井和愛(1905~1971)。文学博士。早稲田大学文学部東洋史学科卒業後、東京大学教授となる。中国及び朝鮮半島の調査・研究を行い、東アジア考古学の発展に寄与した。また、北海道における調査も精力的に行った。
- 132) 伊藤昌一(1907~1982)。北海道帝国大学医学部解剖学教授。児玉氏が中心となって推進していたアイヌの形態学・人類学的研究に加わり、アイヌ及びモヨロ貝塚人の頭蓋研究を精力的に行った。
- 133) 北海道大学医学部解剖学教室の児玉作左衛門教授を団長として、伊藤昌一教授、松野正彦助教授、大場利夫講師と学生らで構成されていた。なお、礼文町(1972)によれば、1948(昭和23)年に当時の船泊中学校兵藤教官が浜中地区で人骨を発見し、同大同教室に送付したことが調査のきっかけになったという。また、後文の中村誠二技師(註134)が調査に同行したことにより、調査中の映像が全国に報道されたとのことである。
- 134) 中村誠二(1914~1985)は、江差町出身のわが国を代表するドキュメンタリーカメラマン。
- 135) 現在のオシオンナイチャンに該当。長昌寺のすぐ横に伸びる段丘先端の平坦面に構築されている。現在は壕跡1本を残すのみである。
- 136) 弁天1・2号チャン。1967(昭和42)年、稚内市指定文化財に指定。
- 137) 抜海岩陰遺跡。1963(昭和38)年、北海道学芸大学旭川分校考古学研究室により調査されている。1967(昭和42)年、稚内市の指定文化財に指定(稚内市教育委員会, 1964)。
- 138) この土器は現在、稚内市北方記念館に展示しているオホーツク式土器で、抜海出土とされ

ており、胴部に四足獣と思われる線刻が施されている。

- 139) 豊里遺跡：1952(昭和27)年、札幌西高校により調査が行われ、擦文時代の竪穴から、太刀ほかが出土している。1955(昭和30)年、1957(昭和32)年には北海道大学の大場利夫らにより計6軒の擦文時代の竪穴住居の発掘調査が実施されている。
- 140) 北海道大学により調査が行われた6軒の竪穴住居の土地所有者。
- 141) 稚内市教育委員会 飯田勇氏。
- 142) 稚内市峰岡地区の旧地名。1969(昭和44)年に地域ぐるみで市街地への移転が行われ、同地区は解散している。
- 143) 峰岡旧神社遺跡。擦文文化に伴うと考えられる方形の竪穴が確認されている。
- 144) 佐藤豊(1922～2009)。樺太生まれ。1942(昭和17)年樺太鉄道の機関士となり、1945(昭和20)年からシベリア抑留、1949(昭和24)年～1979(昭和54)年まで国鉄で勤務。この間浜頓別町教育委員、浜頓別町文化財保護委員、町史編纂専門委員などを歴任。また、継続的に地域の歴史研究活動に携わってきた(佐藤, 1997, 2002)。
- 145) 栄和遺跡。海岸砂丘上に位置する縄文時代早期～中期・続縄文時代・擦文時代の複合遺跡。擦文時代の竪穴式住居が257軒確認されている(新岡・佐藤, 1975; 浜頓別町史編集委員会, 1995)。
- 146) 豊牛遺跡。国道238号線から道道豊牛下頓別停車場線に入ってすぐの海岸段丘上、標高6～9mに位置する。縄文時代中期・擦文時代の複合遺跡。
- 147) 豊寒別段丘遺跡。海岸段丘上に位置する縄文時代中期・後期・擦文時代の複合遺跡。擦文時代の竪穴式住居が87軒確認されている(浜頓別町史編集委員会, 1995)。
- 148) 海岸砂丘上に位置する続縄文時代・擦文時代の複合遺跡。火葬場もベニヤ遺跡が立地する海岸砂丘上にある(浜頓別町史編集委員会,

1995)。

参考文献

- 赤堀英三, 1932. 北海土石器巡検. ドルメン, 2-1: 51-65.
- 千代肇, 1988. 仮称恵山式土器. 北海道考古学, 24: 22-28.
- 出村文理, 1988. 名取先生と北大. 北海道考古学, 24: 37-39.
- 後藤寿一, 1932. 北見国枝幸郡枝幸村の遺跡について, 蝦夷往来, 10: 150-163.
- 浜頓別町史編集委員会, 1995. 浜頓別町史. 1092pp.
- 長谷部言人, 1926. 本輪西貝塚の鹿角製銚頭. 人類学雑誌, 41-10: 71-75.
- 長谷部言人, 1927. 円筒土器文化. 人類学雑誌, 42-1: 28-41.
- 木村信六, 1937. 樺太の石器時代. ミネルヴァ, 2-1: 32-39.
- 北構保男, 1939. 北海道稚内町附近の先史時代遺蹟調査予報. 上代文化, 17: 32-49.
- 北広島市教育委員会編, 2002. 後藤寿一考古学関係調査資料(北広島市文化財調査報告I). 107pp.
- 清野謙次, 1969. 日本貝塚の研究. 567pp. 岩波書店.
- 中田裕香, 2000. 「北海道式古墳」発掘の頃. 貝塚, 55: 27-35.
- 名取武光, 1960. 網と釣の覚書. 北方文化研究報告, 15: 141-205.
- 名取武光, 1972. 楡の老木. アイヌと考古学, (一): 3-5.
- 新岡武彦, 1930. 樺太石器時代土器の研究. 樺太日日新聞: 10月5日-20日.
- 新岡武彦・佐藤和利, 1975. 枝幸郡浜頓別町栄和竪穴住居趾群の測量調査について. 北海道考古学, 11: 79-84.
- 新岡武彦・宇田川洋, 1990. サハリン南部の遺跡. 北海道出版企画センター. 264pp.
- 新岡武彦・宇田川洋, 1992. サハリン南部の考古資料. 北海道出版企画センター. 326pp.

- 西田彰三, 1930. 本道に於ける石器, 土器の考察, (一) - (十). 北海タイムス, 1月10日-25日.
- 西谷栄治, 1991. 関正資料目録その1. 利尻町立博物館年報, (10): 65-72.
- 西谷栄治, 1992. 関正資料目録その2. 利尻町立博物館年報, (11): 51-60.
- 野村崇編, 2008. 樺太考古学のパイオニア 木村信六伝, 165pp.
- 大場利夫・新岡武彦, 1972. 北海道枝幸群枝幸町川尻チャシ調査概報. 枝幸町教育委員会, 32pp.
- 大場利夫・大井晴男編, 1973. オンコロマナイ貝塚. 東京大学出版会, 331pp.
- 大場利夫・大井晴男編, 1976. 香深井遺跡, (上). 東京大学出版会, 908pp.
- 大場利夫・大井晴男編, 1981. 香深井遺跡, (下). 東京大学出版会, 841pp.
- 大場利夫・管 正敏, 1977. 枝幸郡浜頓別町日の出遺跡発掘調査報告. 北海道考古学, 13: 59-77.
- 礼文町, 1972. 礼文町史. 906pp.
- 犀川会編, 1933. 北海道原始文化聚英, 210pp.
- 齊藤利道, 1994. 南洋群島の記録. 枝幸のあゆみ. 古老談話集. 枝幸町教育委員会, 59pp.
- 佐藤雅彦, 2016. 関正資料目録. その5-追加と訂正-. 利尻研究, (35): 11-21.
- 佐藤隆広, 1980. ホロナイボ遺跡. 枝幸町教育委員会, 207pp.
- 佐藤隆広, 1981. ホロナイボ遺跡II. 枝幸町教育委員会, 43pp.
- 佐藤隆広, 1983. ウエンナイ2遺跡. 枝幸町教育委員会, 83pp.
- 佐藤豊, 1997. アイヌ語解説. 浜頓別町文化財愛護少年団, 73pp.
- 佐藤豊, 2002. 筆しずく. 浜頓別町郷土史研究会, 198pp.
- 関正, 1949. 遺跡を尋ねて. 北の旅: 183-195.
- 関正・直良信夫, 1973. 室蘭市本輪西遺跡調査概報. 考古学ジャーナル, 84: 11-13.
- 高倉新一郎, 1951. 北海道考古学事始. 吾がふるさと, 2: 1-4.
- 稚内市幸生・土肥研晶, 1992. 声問川大曲遺跡. 稚内市教育委員会, 139pp.
- 内山真澄編, 2001. 稚内市声問川右岸1・2遺跡. 稚内市教育委員会, 168pp.
- 宇田川洋校註, 1981. 河野常吉ノート, 1. 北海道出版企画センター, 228pp.
- 稚内市教育委員会, 1964. 稚内・宗谷の遺跡. 142pp.
- 稚内市市史編纂室, 1968. 稚内市史. 1264pp.
- 稚内市市史編さん委員会, 1999. 稚内市史, 第二巻. 1121pp.
- 山田秀三, 1984. 北海道の地名. 586pp.
- 山内清男, 1967. 日本遠古之文化〔補註付・新版〕. 先史考古学会(初版1939), 31pp.
- 八幡一郎, 1922. 北海道北見国礼文島の石器時代の遺物(其一). 人類学雑誌, 37-12: 445-450.
- 八幡一郎, 1923. 北海道北見国礼文島の石器時代の遺物(其二). 人類学雑誌, 38-3: 106-111.
- 八幡一郎, 1925. 礼文島発見の土石器. 人類学雑誌, 40-1: 33-36.